

Title	大学院教育の質保証フレームワーク策定までの道程
Author(s)	林, 透
Citation	CGEI アニュアルレポート 2012: 11-15
Issue Date	2013-09
Type	Research Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/11518
Rights	
Description	. 活動報告 / Center Activities, (2) 質保証枠組みの方策 / Some ways for Quality assurance framework

< 報 告 >

大学院教育の質保証フレームワーク策定までの道程

林 透（大学院教育イニシアティブセンター客員准教授）

The Process for the Establishment of Quality Assurance Framework of Graduate Education

Toru HAYASHI

(Visiting Associate Professor, Center for Graduate Education Initiative)

Abstract : At the time of preparation of Center Graduate Education Initiative(CGEI), we were interested in only the purpose and roadmap of 3 units. Through the implementation of CGEI tasks, we proposed the detail purpose, Quality Assurance Framework of Graduate Education. In 2013, we have succeeded to establish 4 policies and completed the framework. For the next step, we have to focus on the improvement of learning goals at the coursework and laboratory education. It is good chances to redesign the advanced educational system in JAIST.

[キーワード：大学院教育の質保証，4つのポリシー，学習目標]

1 はじめに

これまで、大学院教育イニシアティブセンターの3つのユニットを中心とした組織設計については、対外的な事例報告等の場面で盛んに情報提供してきたところである。ここでは、本センターの組織設計とともに、センターの事業目標を明確化するために掲げた大学院教育の質保証フレームワークの狙いと具体について詳述したい。センター事業が3年目を終えて、その取組を中間評価する時期にあるという意味も込めて、本稿を進めていきたい。

2 大学院教育の質保証フレームワーク策定に向けた前提と経緯

大学院教育イニシアティブセンターの組織設計において、私自身が3つのユニットによる融合的展開を具体的に提案する一方、現・ICTユニットリーダーである長谷川准教授が3つのユニットの詳細のロードマップの具体を提案した。当初のロードマップに掲げた項目は以下の通りであり、センターの取組はその方向性で大筋進んでいると考えている。

II. 活動報告

<p>目的及び重点項目</p> <p>【センターの目的】 修了学生の質を保証する客観的で信頼のある教育・研究指導方法の確立と次世代スタンダードとなる先進的大学院教育の実践・普及</p>	
<p>《教育力・指導力の向上》 教育・研究指導の質向上のための個別サポートを集約し、構成員の自律的参加と意識共有を促進する組織的な大学院 FD 活動の支援を実施する</p>	(1) 大学院 FD 活動の実質化支援
	(2) 先端的大学院 FD 活動の専門分野を横断した展開
	(3) 専任スタッフによるコンサルテーション、オンラインコミュニティ環境の提供
	(4) 教育・研究指導の質向上のためのガイドブック、ハンドブック、オンライン研修環境の開発
	(5) 専門分野単位の標準講義ノート（導入・基幹講義）開発支援
<p>《データ集積と力量水準点の確立》 データベースを活用した科学的なアプローチを通じて、教育・研究指導の客観的な質保証を実現するための評価基準を確立する</p>	(1) 教育・研究指導評価改善システムの開発・運用に基づく現状・課題分析
	(2) 専門分野別試験問題データベースの開発・運用に基づく試験問題モデルの構築
	(3) ポートフォリオシステムの開発・運用に基づく教育・研究指導プロセス評価法の構築
	(4) Graduation Policy・ロールモデル・スキルベンチマークに基づくカリキュラム評価法の構築
	(5) 大学院教育改革のためのファクトデータの集約と評価・分析に基づく組織診断支援
<p>《社会のニーズに応える人材育成の研究》 教育・研究指導に関する国内外の先進事例の調査・研究を通して、効果的かつ持続可能な質保証の方法論を研究・提言する</p>	(1) 高等教育研究者／企業教育担当者と連携した質保証・質向上に関する実証研究
	(2) 研究科・専門分野に応じた JAIST Graduation Policy の制定
	(3) 修了生に対する教育・研究指導の質保証に関する体系的な追跡調査に基づくロールモデルの提案
	(4) 国際的研究者としての質保証を実現するスキルベンチマークの提案

2010年4月以降、センター事業を具体的に動かしていく必要性の中で、事業のミッションや3つのユニットの活動項目をオーバーラップさせる達成目標の明確化の必要性を強く感じた。そこで、2010年度中盤において、大学院教育の質保証フレームワークとして、4つのポリシーの策定を達成目標に掲げることを提案した。

センター内では、4つのポリシーを策定すること自体に非常に前向きであったが、関係情報の不足や学内行政に結び付けるパスの不在などが原因して、学内に向けて4つのポリシーの必要性を訴える機会を得ることに苦心した。センター設置から2年目の2011年7月に開催した拡大サポートボードセミナーでの今後の大学院教育に関する率直な議論や4つのポリシーの必要性の提案、さらには、2011年10月にセンター共催事業として開催した大学コンソーシアム石川FD・SD研修会を契機とした学内でのポリシー策定の急激な自覚化による検討の具体化によって、センターが掲げた大学院教育の質保証フレームワーク策定の歯車がやっと動き始めたというのが実感であった。一方において、このフレームワークの設定自体が戦略的に間違っていなかったことを実感した瞬間でもあった。

その後、学内では、我々が提案した4つのポリシーのうち、認証評価対応などを考慮して、3つのポリシーの策定が先行する形となり、研究室教育に関するポリシーは、翌年度に個別審議する形となった。ただし、平成24年度の年度計画に明確することによって、フレームワークを確定される筋道を保証する伏線を引いておくことにした。このプロセスでは、センターと事務機構との連携(教職協働)による共通理解があったことを特筆しておきたい。

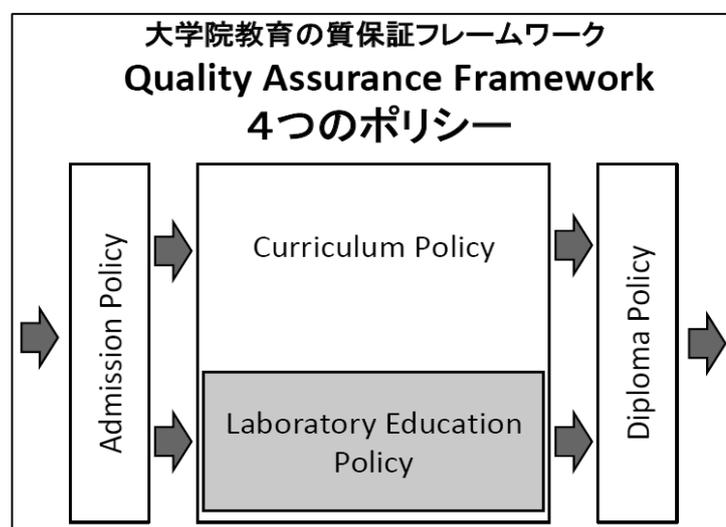


図1 大学院教育の質保証フレームワーク

翌平成24年度における研究室教育に関するポリシーの策定は必ずしも容易ではなかった。日本では唯一の研究室教育ポリシーの策定への挑戦は、各教員が個々に管理運営する研究室教育について、全学として統一的なポリシーを策定できるのか、策定の必要性があるのかという議論の応酬であった。大学院教育における不可侵(アンタッチャブル)な領域への挑戦であったといえよう。全学委員会での何度かの差し戻しの議論を経て、平成25年1月に、研究室教育ポリシーが制定され、大学院教育の質保証フレームワークはここに一定の達成を得ることとなった。

《研究室教育ポリシー(全学版)》

本学は、大学院教育を構成する要素として、講義による教育と対を成す研究室教育を、学生の資質や学修目標を勘案した多様かつ自由度の大きな環境下における教育の場として位置付ける。

学位授与に至るプロセスにおいて重要な機能を果たす研究室教育に関するポリシーをここに定め、その仕組みを用意する。

[博士前期課程]

博士前期課程では、時間をかけて基礎理論を理解させ、問題解決に応用できる能力、与えられた問題を解決する能力を育むため、個別指導や少人数規模による研究指導など適した方法により指導を行う。基礎理論の理解に基づく専門知識の修得や関連研究の調査を踏まえた研究計画の立案・実施、さらには研究成果の発表に至る一連の研究プロセスに必要な能力を育む。

[博士後期課程]

博士後期課程では、俯瞰的な視野から特定の研究分野における課題を発見し、その解決方法を科学的に記述できる能力を育むために、個別指導に重点を置いた研究指導を行う。専門知識の修得や関連研究の調査を踏まえた独創性ある研究計画の立案・実施、さらには研究成果の発表に至る一連の研究プロセスを、自立しつつリーダーシップを持って遂行することができる能力を育む。

3 ポリシーを支える下位概念

センター設置3年目にして、4つのポリシー策定に漕ぎ着けたことは大きな成果であった。しかし、センター内での議論を踏まえれば、ポリシーを支える下位概念の提案については多くの課題を残している。研究室教育については、ポリシーの策定作業と同時に進めた研究室教育シラバスを提案し、全学FD・SDセミナーのグループワークでの試行を行い、一定の成果を上げることができた。しかし、他大学においても具体化が進むカリキュラムマップやルーブリックの実践につ

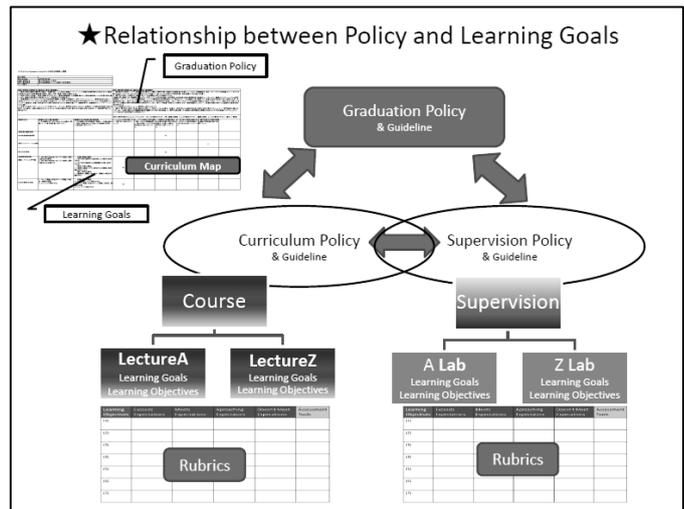


図2 ポリシーと学習目標の関係性

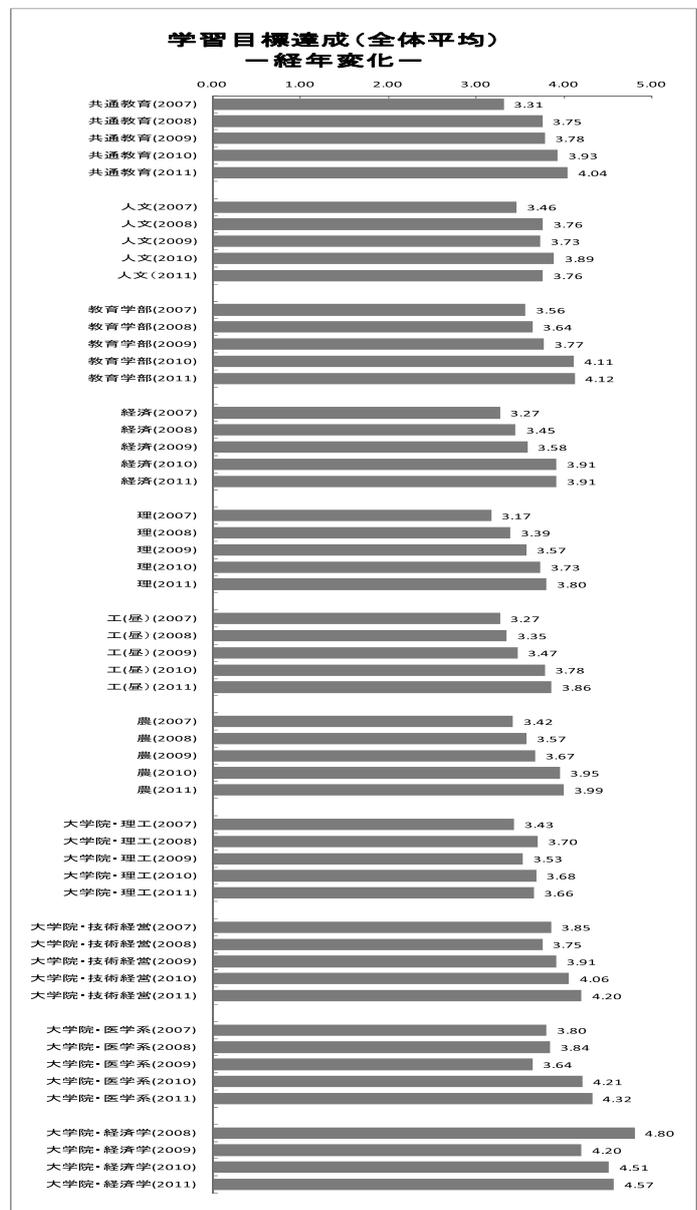


図3 山口大学・学習目標達成度の経年変化

いては学内への提案に至っていないのが現状である。コースワークと研究室教育における学習目標をどのように明示し、学生に自覚させるかが大きなテーマになろう。そのためには、研究室教育シラバスの提案だけでなく、既存のコースワークシラバスの改善の必要性を議論の遡上に上げることが急務であろう（図2参照）。

例えば、山口大学では、学習目標の達成度を学生に聞いており、その経年別推移データがFD報告書において公表されている（図3参照）。各種教育評価の場面において、教員・学生がコースワークや研究室教育における学習目標を共有し、振り返る機会が必要であろう。

4 まとめ

大学院教育イニシアティブセンターが設置された当初、先端科学技術を主目的とする大学院大学にあって、その持続性を不安視する面があったことは確かである。しかし、慶伊初代学長が「そのモデルは、一つはアメリカの優秀な大学群であり、同時に日本人の心あるいは東洋的儒教的思想でもある」（慶伊・飯島・木村1994）と自壊した本学の大学院教育システムの先進性を誇りとするのであれば、その名が示す通り、大学院教育のイニシアティブをとろうとするセンターの必要性・重要性は今後一層増すのであろう。

科目ナンバリング、クォーター制、複数指導体制など、あらゆる側面において本学の大学院教育システムは優れたものであるが、今日の急速な大学教育改革の進行の中で、時代が追い付いてきていることを強く自覚しなければならない時期に来ている。2012年度に開催した大学院教育改革セミナー2013や全学FD・SDセミナーでの意見等を通して、本学の大学院教育システムをリデザインする時期に来ていることを実感する。この「リデザイン」とは、2008年度から実施された新教育プランのようなオプションなシステム設計ではなく、コースワークや研究室教育の基本的な体制や質保証の仕組みの「塗り替え」を意味している。このような真の改革に向けて、大学院教育イニシアティブセンターが苦心してきた3年間の蓄積が必ずや貢献できると信じたい。

5 参考文献

- 林 透（2011）「北陸先端大・大学院教育の新たな取組について」『東京農工大学・大学教育ジャーナル』第7号，pp.53-57
- 林 透（2011）「（2011年度第5回）FD・SD研修会を開催」『教育学術新聞』2011年11月23日3面
- 慶伊富長・飯島泰蔵・木村正行（1994）「北陸先端科学技術大学院大学の自己評価」『理工系大学院と自己評価ーアメリカの大学院調査からー』財団法人高等教育研究所
- 山口大学大学教育機構（2013）『平成23年度 山口大学のFD活動』pp.59